



日本女性科学者の会 (SJWS) について

The Society of Japanese Women Scientists

＜設立経緯と活動概要と意義＞

日本女性科学者の会は「女性科学者の友好を深め各研究分野の知識の交換を図り、女性科学者の地位の向上を目指すと共に、世界の平和に貢献すること」を目的とし、「日本婦人科学者の会」として1958年に設立され、1996年に「日本女性科学者の会」と改称された。設立には、女性国際民主連合副会長の平塚らいてう女史、日本人初のノーベル物理学賞受賞者湯川秀樹博士をはじめとする世界平和アピール七人委員会の多大なご支援を頂いた。

本会は、自然科学分野の第一線で活躍している会員および非会員による講演会、研究施設等の見学会、海外の著名な女性科学者招待講演会、女性科学者・研究者の地位に関するシンポジウム、交流懇親会など幅広く行っている。

本会は、1996年から男女共同参画推進連携会議に構成員として参加している。2002年から男女共同参画学協会連絡会に加盟し、学協会間での連携協力を行いながら科学技術の分野において、女性と男性が共に個性と能力を発揮できる環境づくり・ネットワークづくりと社会貢献を目指して活動している。さらに、2004年に日本学術会議19期第4部登録学術団体となり、理学振興研究連絡委員会委員および科学教育研究連絡委員会オブザーバーとして活動した。この理学振興研究連絡委員会で起草された「科学・技術を文化としてみる気風を醸成するために」は、第19期日本学術会議第4部対外報告書として2005年6月に10項目の提言を付して刊行された。現日本学術会議20期には、本会から日本学術会議会員として5名(2部:生命科学2名、3部:理学・工学3名;内2名は本会の奨励賞受賞者)が誕生し、現在、活躍中である。また、2003年から2005年には、国立女性教育会館の女性研究者ネットワーク支援のための懇談会に参加し、自然科学と人文社会科学という分野を越えて女性研究者が能力を十分に発揮し、活躍できるようにするために、研究支援に関する情報収集、意見交換、研究成果の社会的活用、異分野の女性研究者ネットワーク化促進に資するための方策について検討した。本年開催された「女子高校生夏の学校」(国立女性教育会館、男女共同参画学協会連絡会など主催)にも共催参加した。

現在、本会は女性科学者育成、地位の向上(男女共同参画環境の整備)を目指して、国内外の、多くの女性科学者・研究者との連携と強化などを進めている。

会員は、理学、工学、医学、薬学、農学、家政学等を専攻する大学、研究機関などに所属する研究者および企業の研究者・技術者で、幅広い科学・技術分野をカバーし、

男性研究者も参加している。本会は、各会員の自己研鑽を支援しつつ、国内外の多様な科学者・研究者・技術者たちとの最新情報交換と研究交流をはかっている。

＜事業＞

- ・総会 : 年1回6月に開催 (同日に奨励賞・功労賞贈呈式挙行)
- ・学術誌 : 年1回発行
- ・学術大会 : 年1回11月開催
- ・ニュース : 年2回発行 (1回は多色刷賞記念特別号)
- ・賞贈呈 : 奨励賞、功労賞の贈呈 (各年若干名)
- ・その他の活動 : 例会講演会、見学会、新春懇談会、シンポジウム、出版刊行

＜支部＞

東北支部 (含む北海道)、東海支部、関西支部、九州支部 (含む四国)

＜記念事業とシンポジウムなど＞

- 1989 創立30年誌発行と懇談会－今後の展望－
- 1993 For Tomorrow 世界の中の日本女性科学者・技術者 (国際シンポジウム)
- 1994 科学技術に女性パワーを活かすためのシンポジウム－科学技術を私たちの身近なものに (文部省女性の社会参加支援特別推進事業：シンポジウム)
- 1995 科学技術系女性人材の育成－アンケート調査、理科離れの中で (同上事業：調査研究)
- 1996 第1回奨励賞・功労賞贈呈式および奨励賞受賞記念講演会 (以後、毎年開催)
- 1996 親と子の理科実験教室－考えよう地球環境 (文部省女性の社会参加支援特別推進事業)
- 1997 サイエンスボランティア女性たちの出前理科実験 (同上文部省特別推進事業)
- 1998 サイエンスボランティア科学の芽を育てる地域女性たち (同上文部省特別推進事業)
- 1999 11th International Conference of Women Engineers and Scientists
(第11回国際女性技術者科学者会議) 日本学術会議、日本技術者フォーラムと主催
- 2000 日本女性科学者の会学術年報 創刊 (以後、毎年刊行)
- 2001 第1回日本女性科学者の会学術大会開催 (以後、毎年開催)
- 2002 パネルディスカッション 21世紀の科学教育への提言
- 2003 高齢化社会で活躍するための条件 (第1回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム分科会)
- 2004 問題を科学する－ヒトはなぜ傷付くのか？傷付くとどうなるのか？ (学術大会講演会)
- 2005 科学技術分野で女性研究者が活躍するための四つの条件－男女共同参画の実現に向けて－
(文部科学省女性の社会参画支援促進事業：シンポジウム 和光市教育委員会・理化学研究所と主催)
- 2005 東西医療の融合をめざして (学術大会シンポジウム)
- 2005 新たな未来に向かって 科学技術と女性－最前線の群像と科学像 (国立女性教育会館シンポジウム)
- 2006 社会のための科学－サイエンスコミュニケーション－ (学術大会シンポジウム：予定)

＜出版刊行物＞

- ・日本女性科学者の会創立 30 年記念誌 (1989. 10)
- ・科学技術を私たちの身近なものに(シンポジウム記録) (1994. 11)
- ・科学技術系女性人材の育成について(アンケート調査研究報告書) (1996. 2)
- ・親と子の理科実験教室(体験実験) (1997. 3)
- ・サイエンスボランティア・女性達の出前実験 (1998. 2)
- ・日本女性科学者の会 この 10 年の歩み (1998. 12)
- ・サイエンスボランティア・科学の芽を育てる地域女性たち (1999. 2)
- ・日本女性科学者の会 学術年報 第 1 巻 第 1 号 (2001. 3)
- ・日本女性科学者の会 学術年報 第 4 巻 第 1 号 (2004. 3)
- ・日本女性科学者の会 学術誌 第 5 巻 第 1 号 (2005. 3)
- ・科学・技術分野で女性研究者が活躍するための四つの条件－男女共同参画の実現に向けて－ (2005. 3)
- ・日本女性科学者の会 学術誌 第 6 巻 第 1 号 (2006. 3)

＜講演会＞

(*印は非会員)

1990. 6 新しい実験医学の始まり..... 医博 勝木元也*
1990. 9 遺伝情報の発現の仕組み..... 医博 都河明子
1990. 9 究極の物質；クオーク..... Ph. D 数野美つ子
1990. 12 動物の体色発現の変化と仕組..... 理博 大島節子
1990. 12 精子形成の分子機構と不妊..... 農博 大原生子
1991. 2 ココヤシの発芽における Haustorium の形態と機能..... 農博 村上高
1991. 6 人口動態の長期変動'結婚・出産・死亡を中心に..... 理博 今泉洋子
1991. 6 Women's Many Lifetimes in Science..... Ph. D S. Traweek*
1992. 1 第 9 回国際女性技術者・科学者..... Ph. D 数野美つ子
1992. 2 尾瀬沼の富栄養化の歴史..... 主幹 矢島久美子
1992. 2 太陽紫外線と人体影響..... 工博 佐々木政子
1992. 6 年令と眼精疲労..... 医博 諏訪久
1992. 6 絹織物のテクスチャー..... 工博 馬越芳子
1992. 11 知的所有権の話..... 理博 角谷治子
1992. 11 カロリーメトリーによる蛋白質の立体..... 工博 上平初穂
1993. 6 生物を利用する環境改善の話題..... 医博 佐々学*
1993. 12 科学衛星"ようこう"による太陽フレア..... 理博 橋本静代
1994. 6 これからの教育..... 参議院議員 森山真弓*
1994. 9 抗老化関連の東洋薬物'肉従容'について..... 薬博 大倉多美子
1994. 9 大豆食品一その栄養的・産業的価値..... 農博 斎尾恭子

1995. 6 日本の活断層と関連する諸問題..... 理博 太田陽子
1996. 6 痛覚過敏の末梢神経機構..... 医博 水村和枝
1996. 6 レンズ特異的に発現する MIP 遺伝子の発現制御..... 理博 丸山千秋
1997. 6 分子組織体の構造と相互作用..... 工博 栗原和枝
1997. 6 ヒトにおける放射線リスク推定の疫学的研究..... 医博 清水由紀子
1998. 1 男女共同審議会報告..... 理博 石田瑞穂
1998. 6 D-アミノ酸を指標とした老化の基礎研究..... 医博 藤井紀子
1998. 11 ガス系消火剤と燃焼化..... 理博 佐宗裕子
1998. 11 都市計画から見えるもの..... 寿崎かすみ
1999. 6 妊娠・月産期にみられる睡眠障害に関する基礎的研究..... 医博 木村昌由美
1999. 6 分子集合系の構築とキャラクター化..... 理博 今柴東洋子
2000. 6 細胞機能発現におけるジアシルグリセロールキナーゼアイソザイムの役割. 医博 山田恵子
2000. 6 固体酸触媒に特有な酸触媒反応機構の解明..... 工博 野村淳子
2000. 10 アホウドリよ永遠..... 東邦大学理学部助教授 長谷川博*
2001. 6 有機・固体光化学の開拓と展開..... 工博 小島秀子
2002. 1 「総合的な学習の時間」－女性(男性)科学者はどのように貢献できるか－
..... 文部科学省審議官 玉井日出夫*
2002. 11 科学教育研究の展開..... メディア教育開発センター所長 坂本昂*
2003. 11 小児 2 型糖尿病をめぐって：日本における現状..... 医博 大和田操*
2003. 11 高大一貫教育の目指すもの..... 東海大学学長 理博 高野二郎*
2004. 1 企業の中で女性はどう働いてきたか?... (株)資生堂学術部部長 長沼雅子*
2004. 11 老化のメカニズム－ヒトは誰でも 100 歳まで生きられる?... 医博 石井直明*
2005. 1 日本学術会議の新体制について..... 理博 小舘香椎子
2005. 11 女性の性と生－豊かな女性のライフを支援する統合医学を目指して. 医博 丸山征郎*
2005. 11 女性と漢方治療..... 医博 福澤素子*
2005. 11 医療落語 「ヘルシートーク」..... 医博 立川らく朝*

＜歴代会長（敬称略）＞

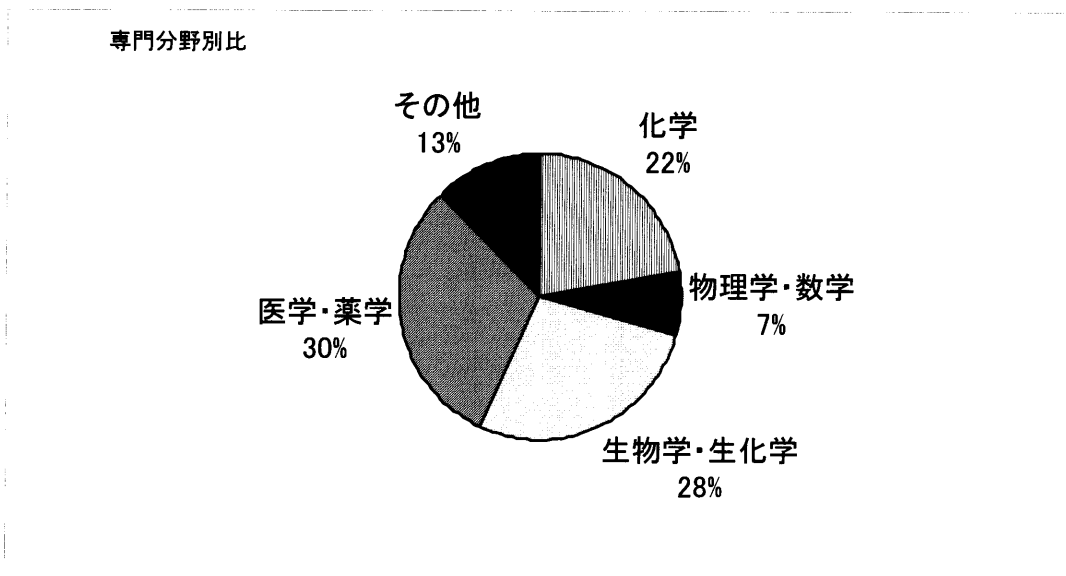
初代：阿武喜美子、第2代：幾瀬 マサ、第3代：数野美つ子、第4代：鈴木益子

＜平成 17 年度版男女共同参画白書 Column での紹介＞

平成 17 年度版男女共同参画白書(内閣府)の Column「我が国における男女共同参画のためのネットワーク」欄に、女性科学研究者の環境改善に関する懇談会(JAICOWS)、男女共同参画学協会連絡会と共に本会が紹介された(p. 35)。

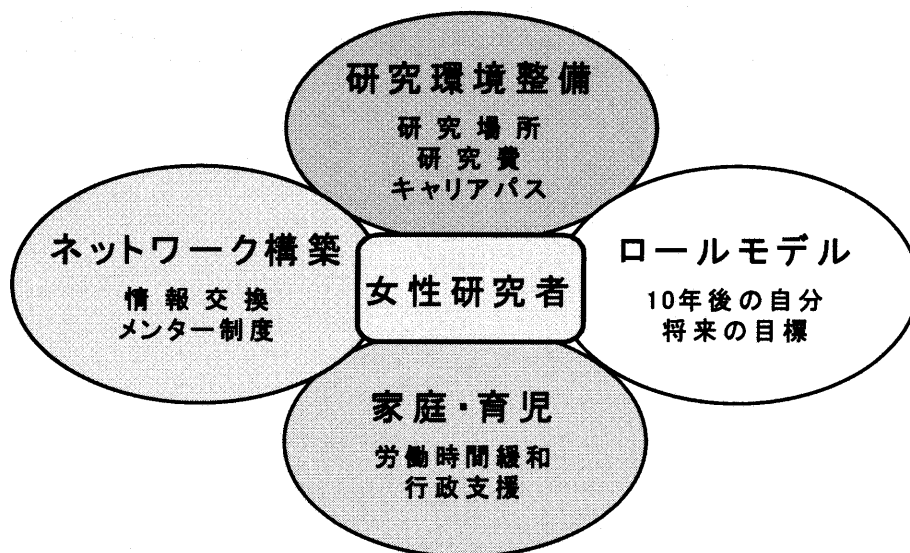
日本女性科学者の会会員の専門分野別比

(2006年3月現在)



* 物理学には天文学、気象学、地学、情報学を含む

日本女性科学者の会が提案する —科学・技術分野で女性研究者が活躍するための四つ条件—



日本女性科学者の会

平成16年度文部科学省生涯学習政策局委嘱事業 シンポジウム (2006.3.26)

「女子高校生夏の学校 ～科学・技術者たちのたまごたちへ～」

ポスター例示 (国立女性教育会館、男女共同参画学協会連絡会、文部科学省など主催) (2006. 8. 18)

P-5 活躍する女性科学者・研究者たち -日本の明るい未来を切り拓くのは私達とあなたたちです-

SJWSの会員が二人選ばれました!



Shinobu Kitazume

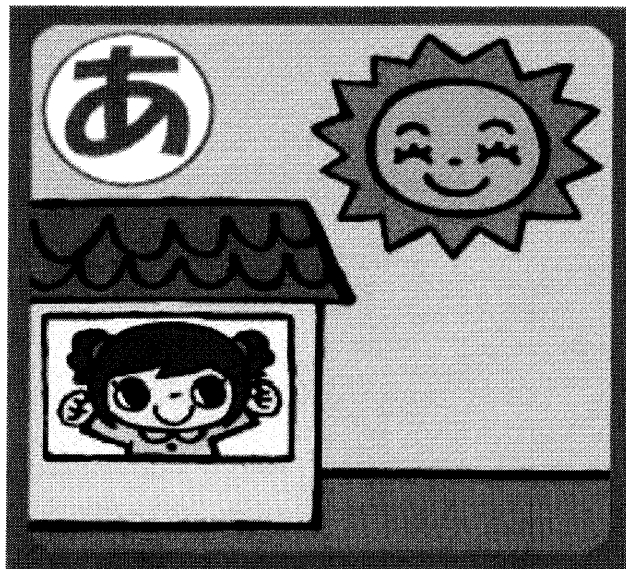
北爪しのぶ 理化学研究所フロンティア研究員。先進国など平均寿命が延びている国では認知症が大きな問題になっているが、代表的な疾患であるアルツハイマー病の原因とされる脳内蓄積物の形成プロセスの研究に大きく貢献している。

Toshiko Sawaguchi

薄口聡子 東京女子医科大学教授。健康な赤ちゃんが突然死亡する乳幼児突然死症候群(SIDS)の発症メカニズムを解明。乳幼児が睡眠中に無呼吸になったまま目覚められなくなり、低酸素状態で死亡する、というメカニズムを突き止めた。専門は法医学病理学だが、生理学や病理学、疫学などさまざまなアプローチから研究を行っている。ベルギーでの研究経験もあり、04年には日本女性科学者の金賞勲章を受賞。

担当 松下祥子 (日本大学理工学部 専任講師)

P-6 光で拓く科学の世界



朝日浴び
体内時計の
スイッチオン

(担当 東海大学総合科学技術研究所 佐々木政子)

(文責 佐々木政子 2006. 8)



日本女性科学者の会 奨励賞受賞者一覧 (敬称略)

(2006年8月現在)

第1回 (1996年)

水村和枝 名古屋大学環境医学研究所 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: 痛覚過敏の抹消神経機構特に痛み受容器における感作
 丸山千秋 理化学研究所 特別研究員 (現在 (財)癌研究所研究員)
 受賞理由: レンズ特異的に発現する MIP 遺伝子発現制御での転写因子

第2回 (1997年)

栗原和枝 東北大学反応化学研究所 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: 分子組織体構造と相互作用の研究
 清水由紀子 放射線影響研究所 疫学部副部長
 受賞理由: ヒトにおける放射線リスク推定に関する疫学的研究

第3回 (1998年)

藤井紀子 京都大学原子炉実験所 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: D-アミノ酸を指標とした老化の基礎研究

第4回 (1999年)

今柴東洋子 名古屋大学物質科学国際研究センター 助教授
 (現在 慶応義塾大学理工学部 教授)
 受賞理由: 分子集合系構築とキャラクタリゼーション=バルクから界面まで
 木村昌由美 東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 助手
 受賞理由: 妊娠周産期に見られる睡眠障害に関する基礎研究

第5回 (2000年)

山田恵子 札幌医科大学保健医療学部 助教授
 受賞理由: 細胞機能発現における DGK アイソザムの役割=EF バンドの役割
 野村淳子 東京工業大学資源研究所 助手
 受賞理由: 固体酸触媒に特有な酸触媒反応機構の解明

第6回 (2001年)

小島秀子 愛媛大学工学部 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: 固相ニ分子反応解析と有機固体光化学の開拓と展開に関する研究
 マーシー・ワイルダー 国際農林水産研究所 主任研究官
 受賞理由: 甲殻類の脱皮・生殖・胚発生に関する生理化学的研究とその養殖技術開発への応用

第7回 (2002年)

小磯晴代 高エネルギー加速器研究機構 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: 素粒子の実験的研究の根幹をなす加速器の開発と素粒子の対称性の研究
 尾崎美和子 理化学研究所 プロジェクトリーダー (現在 早稲田大学 教授)
 受賞理由: 脳の神経構築技術開発において多機能性神経栄養因子ニューレグリン機能を解明

第8回 (2003年)

松島紀佐 東北大学大学院工学研究科 助教授
 受賞理由: 積分方程式による翼空力形状の逆問題設計法の研究と開発をリードし社会貢献度が高い
 北爪 (川口) しのぶ 理所フロンティア糖鎖機能研究チーム 研究員
 受賞理由: アルツハイマー病発症に関与する BACE1 が糖転移酵素の切断・分泌に関わるプロテアーゼであることを解明

第9回 (2004年)

後藤由希子 東京大学分子生物学研究所情報伝達分野 助教授
 受賞理由: MAP キナーゼカスケードの同定と機能の解析に多大な貢献
 甘利幸子 Washington University Physics Department Senior Research Scientist
 受賞理由: プレソラー粒子の隕石からの抽出と二次イオン質量分析計による分析方法の確立に貢献
 澤口聡子 東京女子医科大学医学部法医学 助教授
 受賞理由: 乳幼児突然死症候群に関する生理学的・病理学的・疫学的統合研究をととしての社会的貢献

第10回 (2005年度)

池田啓子 自治医科大学分子病態治療研究センター 助教授
 受賞理由: ナトリウムポンプ α 2サブユニットの神経系における新機能の解明
 松下祥子 独立行政法人理化学研究所フロンティア研究システム散逸階層構造研究チーム 研究員 (現在 日本大学文理学部 専任講師)
 受賞理由: 自己組織化を利用したフォトニクス結晶などを作成し機能性材料の創製に貢献

第11回 (2005年度)

鳥居啓子 University of Washington Associate Professor
 受賞理由: 植物の器官形成を制御する細胞間シグナル伝達機構の解明
 佐藤 縁 産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門 主任研究員
 受賞理由: 有機単分子層修飾による界面電子移動制御と分子認識に関する研究

以上、受賞者 22 名

「奨励賞贈呈の波及効果」

- 受賞後に、8名の受賞者が昇格あるいは専任職に就かれた。
- 北爪しのぶさんと澤口聡子さんが「世界が認めた日本人女性 100人」Newsweek (2006.6.28 日本語版) に選ばれた。資料: 日本女性科学者の会(SJWS)について参照。



男女共同参画社会実現に向けての取り組み

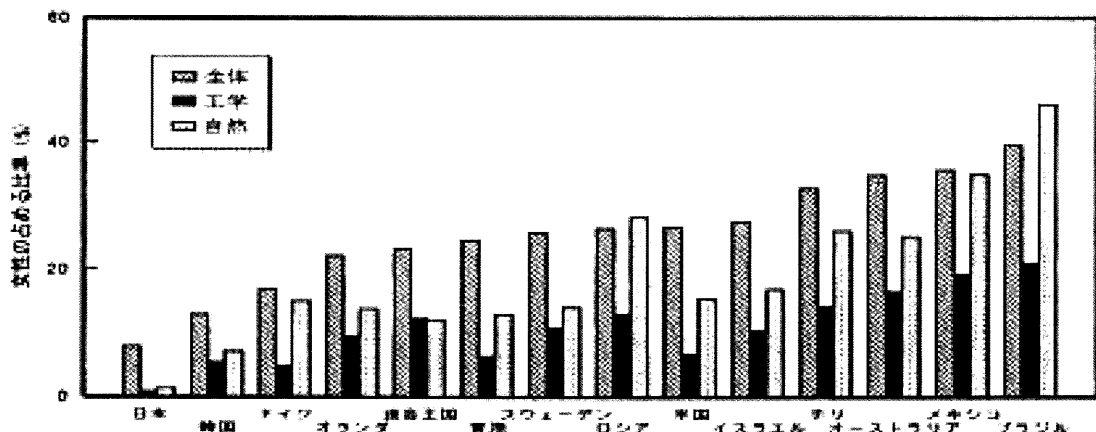
日本女性科学者の会：最近の主なシンポジウム・アンケート調査

科学技術分野の女性科学者を取り巻く研究・社会環境は、国連提唱の「国際婦人年」(1975年)および、その翌年にスタートした「国連婦人の10年」を契機として大きく変化してきた。この年に、本会は下記のような声明を出している。

1. 科学技術分野における婦人の専門教育を推進し、この分野への婦人の職業的参加を奨励すること。
2. 婦人科学技術者に、男子と同等の権利と地位を保障すること。
3. 婦人の社会的活動を容易にするための法規と社会福祉施設の整備をはかること。

同年10月に日本学術会議に初の「婦人研究者の地位向上」に関する委員会が設置された。学術会議は「婦人研究者問題シンポジウム」を1975、76、84年に開催し、本会は委員も委嘱され大きく貢献した。

しかし、日本には未だ科学・技術分野で女性科学者・研究者が活躍できる条件は整っていない。ここに、男女共同参画が諸外国に比べて遅れている具体例として、大学教授職に占める女性比率を示す。各国共に男性優位であり、女性比率は平均24%である。しかし、日本は10%未満、特に自然科学、工学系は1%以下で諸外国中、最低である。この状況は、H8年の文部省「教育指標の国際比較」以降も変化はなく、男女共同参画基本計画(第2次)および第3期科学技術基本計画の実効が待たれるところである。



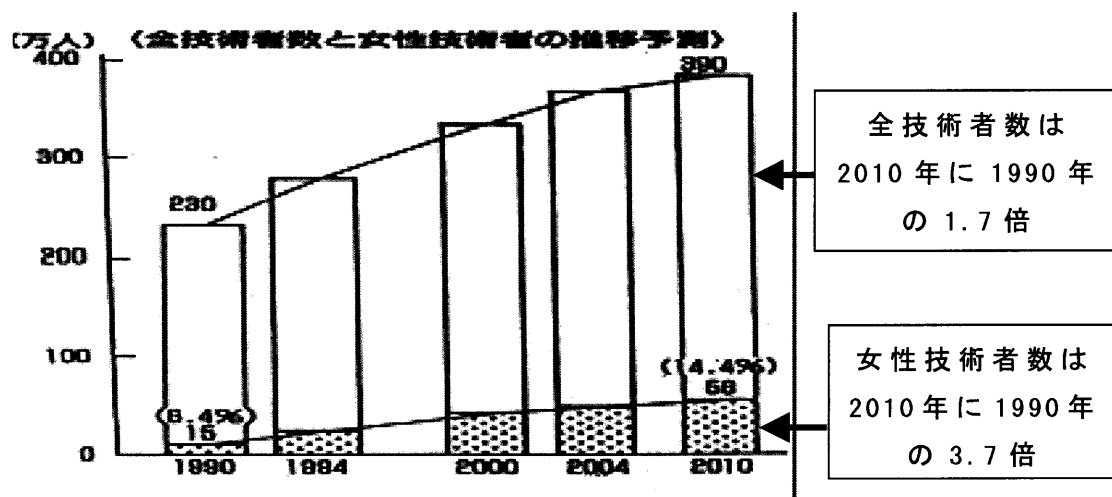
大学教授職に占める女性比率

(有本章、江原武一編著 大学教授職の国際比較:玉川大学出版会 1996).

このような現状を踏まえて、本会は女性科学者の地位改善について数多くのシンポジウムを開催してきた。

- 平成6年度文部省女性の社会参加支援特別推進事業
科学技術分野に女性パワーを活かすための支援事業
シンポジウム「科学技術を私たちの身近なものに」
- 平成7年度文部省女性の社会参加支援特別推進事業
科学技術系女性人材育成のための支援事業
アンケート調査・分析「科学技術系女性人材育成のための調査研究」

上記の1994年に開催されたシンポジウムで、科学技術庁の調査報告から、日本では男性の研究職・技術職を目指す新卒数が1997年にピークを迎え、2010年にはピークの3分の2になる。このため全技術者数は2010年辺りで横ばいになる。その一方で女性技術者数は数は少ないが暫増傾向にあり、人材不足解消への寄与が提示された。



科学技術創造立国を標榜する日本の国政を預かる大多数の政治家は文系出身である。政策決定の場へ女性も含む科学者・技術者の登用が強く望まれる。天然資源が乏しく、人材資源が頼りのわが国の最重要課題は教育であり、10年後、100年後を見据えた教育政策が望まれる。

私たち女性科学者は、小・中・高校生たちが科学・技術分野を目指したくなるような、明るい将来を描かせうるモデル像となるよう行動しつつ、女性科学者・研究者・技術者同士を支援し、次世代育成にも努力している。

本会は、シンポジウムの提言などが男女共同参画基本計画(第2次)および第3期科学技術基本計画に生かされ、真の科学技術創造立国が実現することを心から願っている。

男女共同参画学協会連絡会 1周年記念行事報告

佐々木政子、吉祥瑞枝¹、鈴木益子²

(東海大・総合科技研、¹サイエンスコミュニケーター、²仙台真菌学研)

男女共同参画学協会連絡会 1周年記念行事「男女が共に生きる社会へ」が平成 15 年 10 月 7 日(火)に、日本化学会を会場として開催された。本会は、分科会 a. 少子高齢化社会で活躍するための条件を担当した。司会：鈴木益子

話題提供者 大学から：数野美つ子 元 東邦大学教授

国公立研究機関から：秦珠子 農水省蚕糸昆虫農技研・主任研究官

企業から：角谷治子 元 呉羽化学工業株式会社特許部

ロールモデル：橋本静代 東海大学名誉教授

武井たつ子 元信州大学教授

話題提供者は 10 分の持ち時間で問題点提起を行い、参加者との活発な討論が行われた。ロールモデルでは、「学術振興会奨学制度」を創立された例と子供のための「実験工房クリエイト」を開設された体験談が報告され、出席者に感銘をあたえた。最後に提言がまとめられた。

提言「科学技術立国を支える人材育成をはかるために」

- ① 人間らしく生きるための労働時間短縮の徹底
- ② 出産援助策の強化
- ③ プロを育てるために科学者・技術者の正規雇用の確保
- ④ 女性科学・技術研究者の積極的な育成促進
- ⑤ 高齢科学・技術研究者の働く場の整備

今後は、学術会議へこの提言の採択を働きかけるなど具体的に実現を図るための方策を探っていくことで意見がまとまった。なお、本会の学会活動を示すポスターが第 1 回優秀ポスターに選出された。

文部科学省生涯学習政策局委嘱事業
平成 16 年度 「男女の家庭・地域生活充実支援事業」

女性の社会参画支援促進事業

“科学技術分野における男女共同参画社会の実現にむけて”

1. 事業のねらい

男女共同参画社会の実現にむけて、就労環境、労働条件の整備などに関する制度改革、保育施設の整備、出産、育児支援等への地域支援型サポートの改善には目覚ましいものがあり、女性研究者・技術者が働きやすい環境が急速に整備しつつある。しかし、意識改革面は大きく立ち遅れており、何らかの措置が必要と考えられる。特に、様々な意志決定機関への女性の参加やキャリアアップ、プロモーション、さらには参画促進に向けての意識面については、男女共に未熟な面が多く、行政面における制度改革なくしては急速な改善は期待できない。従って、多様な人材の有効活用のために、科学技術分野で、研究者・技術者が現在抱えている問題点を正確に把握した上で、ポジティブアクション等の行政制度の改革を通して、制度面と共に意識面でも変革を促す必要性がある。本事業のねらいは、一つのモデルケースとして科学技術分野において、多様な価値基準を認識した上で、以下の項目促進に必要な現状を把握し、その結果を踏まえて具体案を提示するための議論の場を設けることである。

1. 女性研究者の人材発掘と育成

多様なキャリアパスを可能にするため、研究者・ポスドク・職員等の募集時の年齢制限緩和および業績評価方法の見直しと共に、出産・育児・介護等の理由で研究を中断した場合のキャリアパスの確保（リスタートフェローシップ等）、博士号取得後のキャリアパスとして、研究職以外の活躍の場も考慮に入れるなど、幅広い人材発掘を目指す。さらに、出産・保育・介護にたいする援助策などを検討する。これは、科学技術分野だけの課題ではないため、援助策について十分な検討が必要である。

2. 科学技術分野における女性リーダーの育成・支援

一定の基準を設け、科学技術研究者の中から優れた研究計画をもつ女性リーダーとしての人材を発掘し、一定期間に、研究場所・研究費・人件費等を提供するような研究助成の種目を、分野を限定せずに拡充し、透明性のある公平な審査の下で、更新が可能となるような制度の設置等を検討する。

3. 政策・方針決定等への女性研究者の参画の拡大

種々の研究費助成・評価、研究員等の選考審査員として、積極的に女性を登用すること等を具体的に検討する。

これらのテーマを柱に、男女共同参画分野の有識者を交えた実行委員会で討論した後、主に科学技術分野の研究者を中心に、一般聴衆も参加するシンポジウムの開催を企画した。シンポジウムでは、現状報告と政策提案課題、問題点の抽出などを討論する。検討課題は、研究者のみならず、一般の働く女性にも共通する課題であり、支援事業のモデルケースになると考えられる。また、シンポジウムまでの経過およびシンポジウムの成果を報告書として取りまとめる。注：シンポジウムの提言は、科学技術政策に反映されるように、日本学術会議、文部科学省、内閣府男女共同参画局、約 80 の学術振興財団等に届けられた。

2. 実施事業（シンポジウムとアンケート調査）

上記目的を遂行するため、下記の実行委員会を発足させた。

1. 日本女性科学者の会・女性の社会参画支援促進事業実行委員会・本部：
佐々木政子（会長・実行委員長）、
尾崎美和子・吉祥瑞枝・大島範子・菅原美子（企画）、
菅原美子・加藤節子（会計）、
濱中すみ子・小浪悠紀子・マーシー・ワイルダー・小川悦代（司会・受付・記録）、
山口陽子・石原良美（総務）
2. 理化学研究所：女性の社会参画支援促進事業実行委員会・支部：
本事業運営にあたっての調査。地域活動調査・および意見のとりまとめ。
間陽子、尾崎美和子（代表者）、大河内眞、谷田聖（総務）
3. 和光市教育委員会：行政指導：榎本俊明、星野裕司（外部委員）
4. 助言有識者：文部科学省・科学技術・学術政策局長・有本健男
5. 連携団体：
独立行政法人国立女性教育会館（理事長 神田道子）、日本分子生物学会（代表委員 大坪久子）、日本生化学会（代表委員 後藤由季子）、日本生物物理学会（代表委員 石渡信一）、日本物理学会（代表委員 鳥飼映子）、日本薬学会（代表委員 金子周司）、日本神経科学学会（代表委員 平田たつみ）

3. 事業内容

公開シンポジウムテーマ：

「科学・技術分野で女性科学者が活躍するための四つの条件
－男女共同参画実現に向けて－」

実施日：2005年3月26日（土）

場 所：独立行政法人理化学研究所・和光キャンパス鈴木梅太郎ホール

参加者：80名

取材協力：朝日新聞社・読売新聞社・毎日新聞社・科学新聞社

事業委託費： 2, 000千円

シンポジウム

科学・技術分野で女性研究者が活躍するための

四つの条件

— 男女共同参画の実現に向けて —

文部科学省生涯学習政策局委嘱事業
平成16年度 男女の家庭・地域生活充実支援事業
女性の社会参画支援促進事業報告書



日本女性科学者の会・和光市教育委員会・独立行政法人理化学研究所
女性の社会参画支援促進事業実行委員会

平成17(2005)年3月

シンポジウムプログラム

午前の部 I 10:00-10:40 (司会 大島 範子)

○主催者挨拶

趣旨説明 日本女性科学者の会 会長 佐々木 政子
理化学研究所から 独立行政法人理化学研究所 理事長 野依 良治
(理事 大熊 健司)

○特別講演

日本学術会議と男女共同参画 日本学術会議 会長 黒川 清
午前の部 II 10:50-12:20 (司会 遠山 嘉一)

○基調講演

男女共同参画学協会連絡会の活動について
男女共同参画学協会連絡委員会 委員長 相馬 芳枝
科学技術人材と男女共同参画
文部科学省 科学技術・学術政策局 基盤政策課長 榊原 裕二
男女共同参画社会基本法と科学技術
内閣府・男女共同参画局 参事官 塩満 典子
理化学研究所における男女共同参画の現状
独立行政法人理化学研究所 総務部長 大河内 眞

○主催者挨拶

和光市における男女共同参画 和光市 市長 野木 実 (企画部長 横内 晃)
午後の部 13:20-15:00 (司会 大坪 久子・吉祥 瑞枝)

○基調講演

応用物理学会の男女共同参画に対する取り組み
東京大学大学院工学研究科 助教授 近藤 高志
生理学会の男女共同参画推進のためのネットワーク作り
名古屋大学環境医学研究所 教授 水村 和枝
分子生物学の分野における男女共同参画のとりくみ
東京大学分子細胞生物学研究所 助教授 伊藤 啓
理化学研究所の男女共同参画実施例
理化学研究所 分子ウイルス研究ユニットリーダー 間 陽子
女性が組織を変える 毎日新聞 科学環境部 記者 元村 有希子

○質疑応答(パネルディスカッション) 15:30-16:40 (司会 菅原 美子)

話題提供：研究職採用制度と男女共同参画 産業技術総合研究所 澤田 美智子

○提言・閉会宣言 16:40-16:50

独立行政法人理化学研究所 研究員 尾崎 美和子

趣 旨 説 明

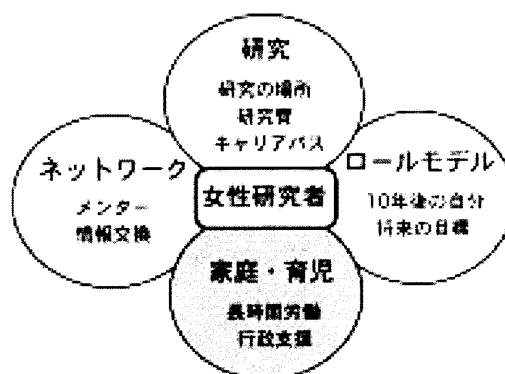
佐々木政子(東海大学総合科学技術研究所 教授・日本女性科学者の会 会長)

日本の男女共同参画は諸外国に比べて著しく遅れています。日本の国際評価を国連開発計画(UNDP)「人間開発報告書」(2003年)で見ると、平均寿命、教育水準、国民所得などから算出される人間開発指数(Human Development Index: HDI)は175ヶ国中9位です。しかし、HDIに男女格差を盛り込んだジェンダー開発指数(Gender-Related Development Index: GDI)は144ヶ国中13位と後退し、さらに、国会議員、専門職、技術職、管理職に占める女性割合と男女推定所得格差等から算出されるジェンダーエンパワーメント指数(Gender Empowerment Measure: GEM)は70ヶ国中44位となり、日本の男女共同参画の国際評価は大変遅れているとなります。特に、日本のGEMを押し下げている要因の一つに科学・技術分野の女性研究者への改善されるべき処遇があります。すでに、「男女共同参画社会基本法」が平成11年6月に公布・施行され平成12年12月に「男女共同参画基本計画」が閣議決定されています。この基本計画実施によって科学・技術分野の女性研究者の処遇改善が進むと期待されましたが5年を経過しても具体的な改善策が示されていません。

日本女性科学者の会は、日本の科学研究発信地として知られる(独法)理化学研究所とその本部がある和光市教育委員会と共同して、科学技術創造立国の担い手として期待されている女性研究者が活躍できる条件整備には、公的諸施策への具体的提言が必要であるとの結論に達し、本シンポジウムを企画しました。

本シンポジウムの目的は、科学・技術分野で女性研究者が男女共同参画を実現するための課題と解決策を明らかにすることです。その課題と具体策を明らかにするため、各分野の第一人者の方々にご講演をお願いし、緊急アンケート調査も実施しました。

本シンポジウムでは、科学・技術分野で女性研究者が活躍するための重要課題として、1. 研究環境の整備、2. 家庭・育児に伴う問題点の解消、3. 研究者間のネットワーク整備、4. ロールモデルの設定の四項目に焦点を絞り、客観的・具体的討論を行い、問題点を把握・整理し、ご参加の皆様と共に男女共同参画が遅れている科学・技術分野の女性研究者が、男女共同参画を実現するための具体策を提案したいと考えます。



提言実現のための課題

シンポジウムの提言を実現するためには、研究者、特に女性研究者の職業選択の自由度が高まること、ある好条件を兼ね備えた人ばかりではなく、多くの女性研究者の能力が発揮される環境作りが必要であり、人口減少や少子化問題等の改善と深く関わっていることは言うまでもない。しかしながら、まさに問題に直面している女性研究者は、男女共同参画活動や支援事業に関わる時間も持てない程時間的に切迫した状況におかれている。このため、研究者をサポートし、男女共同参画支援事業をオーガナイズするためのコーディネーター、アシスタントを配置し、研究者との共同作業により活動を進めていく必要がある。また、有効と思われる施策を検討し、全国規模で実施していくためには、試験的なモデル事業として特定地区で事業を展開することが必要と考えられる。

提言実現のための具体策の提案

- 1) 「男女共同参画モデル地区」を設置し、先端的モデル事業を行う。
- 2) 「男女共同参画コーディネーター、アシスタント」を配置する。
- 3) 「男女共同参画委員会」を設置する。

<実施事項の具体的施策>

- 1) 「男女共同参画モデル地区」を設置し、先端的モデル事業を行う。
 - モデル地区を設置することにより、従来の法規定を越え実状に即した柔軟な運用を行う。
 - モデル地区の目的に応じた資金配分を行い、5年間を限度に理想的な研究環境を目指したモデル事業を行う。
 - 有効と思われる施策を継続するとともに、順次全国へと広げて行く。
- 2) 「男女共同参画コーディネーター、アシスタント」を配置する。
 - 制度の適切な運用を保証するための専任職員として、コーディネーター及びアシスタントを常勤として雇用し、男女共同参画事業に関する全ての側面をカバーし、専従として活動を行う。
 - コーディネーター及びアシスタントは、「男女共同参画委員会」と連携して運用を検証し、より効果的な施策を創造するが、それぞれ独立した組織とする。

3) 「男女共同参画委員会」を設置する。

(I) 委員会の構成と役割

1. 委員会は正副委員長および委員・アドバイザー(内部・外部)から構成される。
2. 委員会活動を適正に運用するため、コーディネーターらと互いに運用を検証する。
3. 委員は、各所から最低1名以上選出し、アドバイザーは男女共同参画活動に携わる外部団体・外部団体経験者・各学会等の委員経験者に依頼する。
4. 正確な現状把握を目的とし、アンケートを実施する。
5. 委員会の下に各ワーキンググループを設置し、諸問題の改善・解決に向け活動する。
6. 委員会の存在と取り組みへの周知を目的とし、委員会における活動は全て内・外部へ情報公開する。

(II) 委員会、コーディネーターの具体的活動内容

1. 啓発に関わる改善

- 女性研究者の意識改革、女性の多様性を理解するための管理職の意識改革等を実行するための啓発セミナーを開催する。
- ロールモデルの紹介・講演・懇親会等を定期的に開催し、研究者同士の交流や意見交換の場を設ける。
- 上記2項目に関する報告書を作成し、配布する。
- 「モデル地区」に所属する女性研究者の活躍や、全国的に活躍する女性研究者を紹介するための資料や情報を収集・整理し、白書を刊行し、広く配布する。

2. 相談室の設置

- 男女共同参画に関連する悩みや問題を気軽に相談できる窓口や談話室を設置し相談員を置く。相談にあたる相談員は、委員会の非常勤とし、研究における利害関係のない、人生経験や経歴の豊かな人物(精神科の医師、臨床心理士、弁護士など)が、カウンセリングにあたる。

3. 産休・育休・介護(親・身障者)等に関わる改善—育児・介護等に関わる費用の大部分の支援

- 研究そのものを支援する内容
出産・育児・介護期にある研究者に対し、労働力を補填するための実験補助者や事務補助者を雇用する制度を設ける。
- 研究に従事できる環境を支援する内容
・出産・育児・介護期にある研究者に対しそれに関わる費用の一部を援

助する。

- ・ 出産・育児・介護期にある研究者が、休暇取得中や取得後に、よりスムーズに研究に復帰できるよう、非常勤雇用等の勤務体系を整え、出張や学会参加を可能にする。

○ 産休・育休・介護休暇等の現行制度内容の見直しを行う。

- ・ 各研究者の休暇制度が活用されているかを検証し、実状に即した、より活用しやすい内容に改める。

4. 託児施設に関わる改善

○ 研究者が安心して長期間利用できる常勤保母の雇用数の増加等、既存託児施設の質の向上を図る。

○ 託児施設が設置されていない支所や部署に、託児施設を新設する為の費用を援助する。

5. 転勤等により夫婦が別々の場所で研究を続ける事に関わる改善

○ 転勤等により夫婦・子供が別居となった場合、転勤時にかかる費用や、家庭生活を継続する為に必要な週末等の移動に関わる費用を援助する。

< 提案を遂行する機関(研究所、大学等)に必要な年度予算の試算(5年間) >

○ 男女共同参画コーディネーター・アシスタント(常勤)

人件費: 2, 000万円

○ 委員会設置/運営(委員会設置運営費): 500万円

○ 啓発に関わる改善(セミナー及び懇親会等の開催費用や報告書及び白書の作成費用): 1, 000万円

○ 産休・育休・介護等に関わる改善(育児者、介護者の雇用):
3, 500万円

○ 転勤等により夫婦が別々の場所で研究を続ける事に関わる改善(援助対象者20人: $25万 \times 20人 = 500万$): 500万円

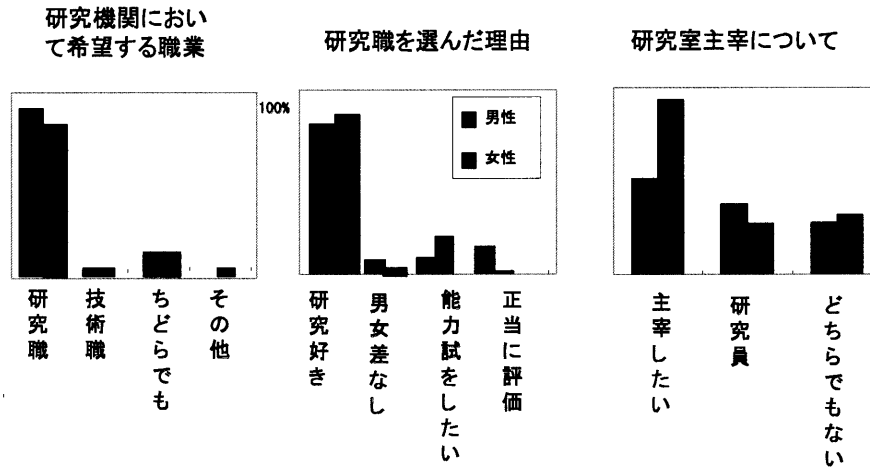
○ 託児施設に関わる改善(1. 常勤保母の雇用等による既存施設の質向上の費用、1, 000万、2. 託児施設新設の援助の費用、 $1, 000万 \times 2ヶ所$ (例: 地区別に) = $2, 000万$ 1 + 2 = 3, 000万): 3, 000万円

○ 相談室の設置(カウンセラーの人件費): 500万円

合計 11, 000万円

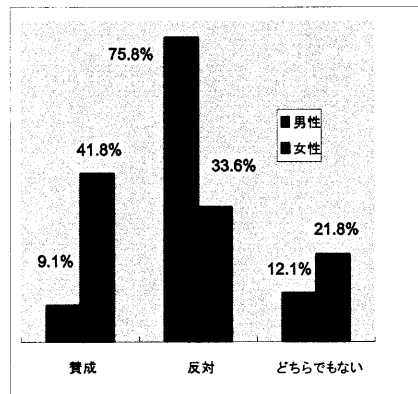
「アンケート実施結果」のまとめ

女性研究者は将来どうなりたいと考えているか？



- 研究が好きで、研究職につきたい。できれば、研究室を主宰したい。

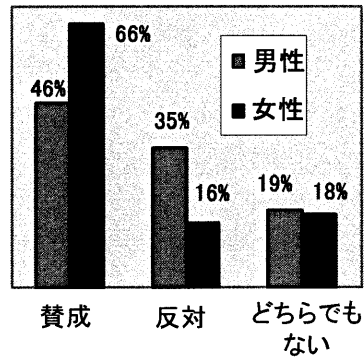
女性研究者が研究環境改善のために望んでいることは？



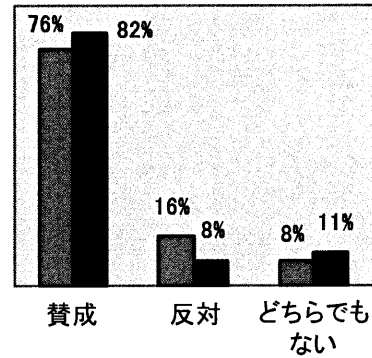
女性の一定比率の雇用

- 研究者は具体的な改善策を望んでいる。
- ステップアップを実現するには、子育て立支援と同様に正當な評価システムの必要性和男女共に意識改革が必要と感じている。
- 実現のための組織が必要である。
- 女性の一定比率の雇用に関して、約半数が賛成。
反対者の75.8%は男性である。
(女性の大多数は女子大学院生比率までの数値引き上げを希望)

「男女共同参画特区」を
設置し、モデル事業を行う



「男女共同参画コーディネーター」を
設置し、制度の適切な運用を保証



・上記項目に、男女（本アンケート回答者）共に賛成している。

アンケート調査期間：2005年3月1～21日（シンポジウム直前）

配布先：日本女性科学者の会、日本生理学会、日本動物学会、理化学研究所

回答者：20～30歳代後半までが多く、女性は20～60歳代と幅広く、男性は比較的若い研究者層である。142名（女性110名、男性32名）。

回答内容：配偶者 有 女 59%、男 54.5%（子供なし）女 54.2%、男 48.5%

雇用形態 任期制 女 38.5%、男 51.5%

アンケートは短期間に行われた。男女共同参画学協会連絡会（平成15年）の大規模アンケートと重なる質問項目では、ほぼ同じ回答割合が得られた。アンケートを通じて明らかになったことは、次の5項目であった。

1. 意識改革の必要性 男女の役割分担意識の解消。
2. 公正な評価をして欲しい キャリアアップに必須要件である。
3. 任期制の運用には課題が多い 研究能力・意欲が高いポストドクから正規雇用への支援体制が不十分であり、制度の充実・改善が不可欠。
4. 出産・育児支援の必要性 システムとして確立、支援策の徹底が強く望まれている。
5. 雇用の機会均等・平等性の確保 職位に関しては、女性が正當に評価されているとはいえない。大学院生と同等比率の女性研究員・大学等教員の雇用が望まれている。

科学・技術分野における男女共同参画に関する提言

科学技術創造立国として国際競争力の向上と経済社会活性化を実現するために、科学技術分野における女性の能力を十分に活かし、その社会活動を促進するための男女共同参画活動が必須といえる。

日本女性科学者の会は、本シンポジウム参加者と共に科学界と日本への貢献が明確に期待できる4項目をここに提言する。

- ① 管理職の意識改革、女性研究者の意識改革のための予算措置を講じる。
- ② 各職種別の明瞭な評価基準を設定し、適正に評価されるシステムを構築する。
- ③ 女性研究者の基本的人権を尊重した雇用・育成を促進するために大学・研究機関の女性研究者割合が一定(女子大学院生在学数に同等)比率を超えた場合、その機関を男女共同参画モデル地域と定め、その機関に特別交付金を提供する。
- ④ 研究者への育児支援策の徹底、研究者間のネットワーク、環境整備およびメンター制への資金支援を行う。

(2006.9.5 日本女性科学者の会 佐々木)

日本女性科学者の会 SJWS



“日本女性科学者の会は女性科学者相互の友好を深め、各研究分野の知識の交換をはかり、女性科学者の地位の向上をめざすとともに、世界の平和に貢献することを目的とする。”

1958年4月日本婦人科学者の会は神田学士会館にて朝永振一郎、平塚らいてう氏等の祝辞をいただき発足した。初代名誉会長黒田チカ。
1996年“婦人”を“女性”と改め日本女性科学者の会となった。
現在構成は本部と4支部（東北支部、東海支部、関西支部、九州支部）
会長佐々木 政子、会員総数362名である。

2003年は日本女性科学者の会が第19期日本学術会議、第4部「理学振興研究連絡委員会」及び「科学教育研究連絡委員会」で活動を開始する年で、男女共同参画学協会連絡会の正式加盟学会である。秋11月には学術大会を開催、学術年報を発刊し、新春懇談会、例会では会員相互の友好を深める。日本女性科学者の会奨励賞・功労賞が1996年に設けられ、本年、第8回目の贈呈式が挙行された。

- 1958年4月 創立
- 8月 日本婦人科学者の会ニュースNo.1発刊
- 1960年2月 黒田チカ名誉顧問（初代名誉会長）就任
- 1963年5月 創立5周年記念公開講演会（日本化学会講堂）
- 1964年6月 第一回国際婦人技術者科学者会議（ICFNS）（ニューヨーク）参加
以後ほぼ毎年参加
- 1966年5月 10周年記念号発刊（No.12）
- 1965年9月 例会：ホジキン女史（1984年ノーベル化学賞受賞）を囲む会
- 1969年5月 所長菅美子初代会長就任
- 11月 例会：ヒュース女史（米婦人エンジニア協会）を囲む会
- 1974年2月 中国科学技術協会招聘で日本婦人科学者訪中
- 1975年6月 国際婦人年にあたって声明発表
- 11月 国際婦人年記念 日本婦人問題会議、国際婦人年日本大会に参加
- 1976年12月 婦人研究者の地位に関するシンポジウム（日本学術会議科学者の地位委員会主催）出席
討議後、婦人研究者の地位改善について本会より回答
- 1978年11月 SJWSニュースNo.46、20周年記念号発刊
- 12月 創立20周年記念祝賀会（神田学士会館）
- 1979年5月 海城大学女子代会長就任
- 1980年1月 海城大学女子会退会（元幹事就任）
- 11月 筑波研究学園都市研究所見学、研究交流会（以後1983年、1985年に筑波婦人研究者問題シンポジウム）
- 10月 国際婦人年の10周年記念日本大会
- 12月 連絡幹事会発足、初の日本学術会議女性学員
- 1981年10月 日本学術会議科学者の地位委員会 婦人研究者の地位分科会設置
- 1983年4月 例会：長徳女史（米科学アカデミー会員）講演
- 1984年8月 本会主催、初公開討論会「主婦科学者」
- 1985年6月 男女産用機会均等法公布
- 7月 国際婦人10周年最終号 ナイロビ
- 1986年5月 第二回婦人問題公開討論会「婦人研究者の現状と展望（I）」
- 9月 シンポジウム「婦人研究者の現状と展望（II）」
- 1987年8月 公開シンポジウム「女と科学と生活」
- 1988年10月 創立30周年記念総発刊
- 1989年11月 国際婦人年連絡会に正式参加
- 1992年11月 ICWIS5日本開催特別招待連絡会 女性5団体
1.日本婦人科学者の会、日本女性技術者フォーラム、工務院女性研究者の会、
農林女性研究者の会、女性建築士の会、
数野美子女子代会長就任
- 1994年2月 国際シンポジウム「For Tomorrow-世界のなかの日本女性科学者、技術者」
- 11月 公開シンポジウム「科学技術と私たちの暮らしのために」報告書発行（文部省委嘱事業）
- 1995年11月 アンケート調査「科学技術系女性人材育成について」報告書発行（文部省委嘱事業）
- 1998年8月 会長改選 日本婦人科学者の会から日本女性科学者の会へ
第1回日本女性科学者の会奨励賞、功労賞贈呈式
第1回受賞者紹介の冠ニュース発行（No.76、彩色刷）以後毎年発行
7月 「親と子の理科実験教室—考えよう地球環境」報告書発行（文部省委嘱事業）
8月 第二回日本女性科学者の会奨励賞、功労賞贈呈式
7月 「サイエンスボランティア—女性たのむ出前理科実験」報告書発行（文部省委嘱事業）
1999年8月 第三回日本女性科学者の会奨励賞、功労賞贈呈式
8月 NHK「おどろ日本」に本会「出前理科実験」放映
12月 創立40周年記念誌「この10年の歩み」発行
- 1999年1月 SJWS創立40周年記念講演会
- 2月 女性と科学—科学の算子である地域女性たち—報告書発行（文部省委嘱事業）
- 6月 所長菅美子第4代会長就任
第4回日本女性科学者の会奨励賞、功労賞贈呈式
男女共同参画社会基本法公布
7月 JOWES11を主催（数野前会長経歴代表として活躍）
12月 JOWES11後集号発刊
- 2000年1月 出前理科実験教室—もっと知りたい身近な放射線—
- 6月 第5回日本女性科学者の会奨励賞、功労賞贈呈式
- 2001年3月 SJWS 学術年報 第1巻第1号 発刊（2000年度）
- 6月 第6回日本女性科学者の会奨励賞、功労賞贈呈式
- 2002年3月 SJWS 学術年報 第2巻第1号 発行（2001年度）
- 6月 第7回日本女性科学者の会奨励賞、功労賞贈呈式
- 9月 SJWSが日本学術会議、第4部「理科教育」の連絡学協会に認定される
- 10月 男女共同参画学協会連絡会に入会
11月 SJWS第1回学術大会開催
- 2003年3月 SJWS 学術年報 第3巻第1号 発行（2002年度）
- 6月 第8回日本女性科学者の会奨励賞、功労賞贈呈式
- 7月 日本女性科学者第5代会長就任
- 10月 男女共同参画学協会連絡会1周年記念行事参加
分科会「少子高齢化社会で活躍するための条件」（鈴木女子前会長司会）
11月 SJWS第2回学術大会開催

- 日本女性科学者の会 奨励賞受賞者名 1986年—2003年
- 水村 和枝（名古屋大学）
 - 丸山 千枝（理化学研究所）
 - 栗原 和枝（名古屋大学）
 - 清水 由紀子（放射線影響研究所）
 - 藤井 紀子（科学技術振興事業団（STARC））
 - 山田 昌子（札幌医科大学）
 - 山田 昌子（札幌医科大学）
 - 山田 昌子（札幌医科大学）
 - 野村 洋子（東京工業大学資源科学研究所）
 - 小島 幸子（東北大学）
 - フジノ、ワイルダー（国際農村発展研究センター）
 - 小嶋 晴代（名古屋大学）
 - 尾崎 道和子（理化学研究所）
 - 松本 紀保（東北大学）
 - 北爪 のぶ（理化学研究所）

- 日本女性科学者の会 功労者賞受賞者名 1986年—2003年
- 阿武 善美子
 - 向井 千枝
 - 福岡 文子
 - 丸山 ロック
 - 石原 道子
 - 菅本 美子
 - 菅本 美子
 - 柳澤 桂子
 - 松尾 幸子
 - 数野 美子
 - 数野 美子
 - 大塚 由紀子
 - 大塚 由紀子
 - 長内 静子
 - 橋本 静代
 - 佐藤 裕子

会員の輪を広げましょう！
自然科学系学会の会員であればどなたでも入会できます。
学会所属でない方は下記事務局にご相談ください。